

# 2017年度GTセミナー 第45回保育環境セミナー後編 2017.9.4～9.6

第30号 2017年9月25日発行

## ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や  
ご要望に応えるコンシェルジュがいる  
ように、保育においても様々な  
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=  
ミマモルジュとして、保育に関する  
ご要望にお応えしていけるよう  
活動していきます。

株式会社ガガヤ 奥山卓矢

## セミナー2日目 実践発表

### 東京 社会福祉法人福翠会 第二いちご保育園

設立：平成28年 定員：110名 見守る保育実践歴：1年半

#### 1年目 経験者（2年から3年）4名と新卒4名でスタート

##### 【保育理念】

生涯を通して、社会を生き抜く力を培う事ができる共同体の創造

##### 【保育方針】 こどもの主体性を育てる保育

##### 【和の心を持てる子】

①日本人としての心…日本の文化・芸術等

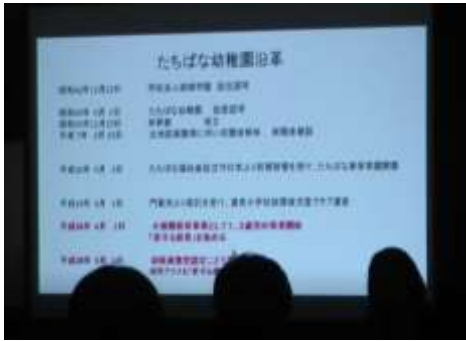
②和をもって貴し……意見を言える、聞ける、折り合いをつけられる。

#### 2年目

- ・リーダーを作らない（仕事は勤務順で決める）
- ・週案はみんなで決める
- ・0歳児1歳児の担当は1か月交代
- ・主になる人は、勤務順で決める



第二いちご保育園の実践発表



たちばな幼稚園の実践発表  
創立50周年を迎えたたちばな幼稚園

## 大阪 学校法人郵橋学園 たちばな幼稚園

設立：昭和42年 定員：名 見守る保育実践歴：2～3年

見守る保育に移行したきっかけ：H26年4月小規模保育事業として1, 2歳児の見守る保育開始。H28年4月幼保連携型認定こども園へ移行。幼児クラスも見守る保育へ。

### 見守る保育導入前

- ・1クラス1担任制 → チーム保育
- ・20数名の同年齢子どもたち+1担任
- ・学年ごとに立てられた年間プランによる活動

### 見守る保育導入後

- ・部屋の壁を取り壊し
- ・345歳児クラスを3チーム
- ・3～5歳の異年齢児60数名+保育者4名
- ・年齢に捉われない、それぞれの成長に応じた選択制の活動



観音寺中部保育園さんの実践発表  
一定量つぎわけられた配膳

## 香川 社会福祉法人 ときわ福祉会観音寺中部保育園

設立：平成11年 定員：120名 見守る保育実践歴：13年

見守る保育に移行したきっかけ：一人ひとりの子どもの活動を保障し、年齢だけでなく、個々の発達に応じて幅の保育をしようとH12年10月から見守る保育を開始。

### ミマモリングソフトを活用しての実践報告

ミマモリングソフトの講習会

- ・複数でチェックすることで違った意見・見方ができる
- ・ベテランと新人で見守る保育を伝えられる
- ミマモリングソフトを活用しよう（毎週水曜日に話し合いを設ける）

K君の発達チェックから、【M2 食べられないものや嫌いなものを少しずつ食べようとする】にチェックが入らない…。

- ・食事前に食べたい量を聞く
- ・「減らす？」から「いっぱい・ちょっと？」の声掛けに変える
- ・いっぱい・ちょっと、大きい・小さい等を壁に掲示する



昼食を窓際で食べる先生方



セミナーQ&A

## セミナーを終えて思うこと

先生A：「お昼どこで食べる？」

先生B：「ねえ、あそこはどう？」

先生C：「いいね、いいね！あそこにしようよ！」

こんなやり取りがあったかどうかは分かりませんが、ふと見ると窓際で昼食を食べている先生方がいらっしゃいました。研修の内容を振り返りつつ、保育談議に花を咲かせていたのかもしれない。

Q & Aの中で藤森先生は、「私たちの散歩は、小学校以降の社会科見学と違うのは、行った先が目的ではなく、行く途中に色々なものを見つけること、気づくこと、感じること。これがお散歩の意味です。行った先の公園で、遊ぶことが目的ではない。」と仰いました。

この秋の季節をよく、スポーツの秋、食欲の秋、読書の秋、様々な表現がなされます。同じように保育の秋というものがあるならば、それは、子ども達が今、興味・関心のあるもののことを指すのかなと思います。

子どもたちがお散歩に行く途中で見る様々なものは、赤や黄色に色づく葉の色以上に、心に色鮮やかに写るのかもしれない。

秋には様々な楽しみ方がありますが、子どもたち一人ひとりが園で自分のやりたいことができる環境があること、それは秋という季節に限らず大切で、それを保障できるのが園でもあるのだと感じました。

窓際で食べている先生方の所に「僕も一緒にいいですか？」と聞いたら新しい関係が生まれたのかなと、今となっては思うのです。昼食時も、先生方同士が繋がれる、そんな工夫を考えてみたいと思うのです。

(報告者：株式会社カグヤ 奥山卓矢)

### ●過去のバックナンバー

#### 第27号

築120年古民家『聴福庵』⑥

#### 第28号

ドイツ大規模同窓会

#### 第29号

第45回保育環境セミナー前編

<http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/>



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢



メールマガジンのご登録は、  
QRコードからお願いします。

---

## 第 45 回保育環境セミナー『Q & A』

---

今回、セミナーにご参加頂いた皆様から寄せられた質問について、【保育環境】【年齢別保育と異年齢児保育】【保育士の対応】【その他】の4項目に分類し、藤森代表に考え方を示して頂きました。

### 【保育環境】

室内の広さが限られています。動の活動が好きな子が多いので室内でもそれを増やしたいがスペースの問題からどう取り入れるか悩んでいます。運動遊びや活動例を知りたいです。

室内環境について悩まれるところが多いと思います。その多くは日本の最低基準に関係する。どのくらいの広さが保育に必要かも研究されている。それからもう一つ地域性がある。私の園は園庭が新宿にあるので広くないと言われるが、私はこの近くで育っている。中高は千代田区で高校はこの会場から見える。園庭・校庭はほとんどなかった。小学校は、上履き下履きもなかった。土を踏むことがなく、道を歩いた靴のまま学校の中も過ごしていた。運動的に偏っているかというそうは思わないし、運動は得意な方だった。自然と触れていないかということそんなこともない。地方の方からすると自然と、どう触れるのというのがある。副園長が岩手の人で東京へ最初に来て、「東京で初めて木の名前を知りました」と言っていた。東京の木には看板がある。こういう街の中で育っているからあまり思わない。子どもの規模によるかもしれないが、スウェーデンの保育を聞いた時に7~10人規模の異年齢で先生がいる。「あまり大人数はよくない、小さい規模でやるべき」ということを昔大阪のなんばのホテルで行われた研修で聞いた。お昼になって外で食べようとしたら、わーと人がいた。7人だけの保育でずっとやっていたら、なんばでは食事ができない、山手線にも乗れない。情緒の安定だからと言ってやっていたら東京では住めない。その時に以前スウェーデンへ行ったことを思い出した。街へ出ても7人くらいしかしない。そういうところだったら落ち着いてできるが日本では無理。地方から東京へ来ると、人が多くて気持ち悪くなることもある。どれがいいかは難しい。広々した園庭で過ごすことは理想かもしれないが、必ずしもそうではないこともある。そういう中では子どもは不思議な生き物で、何かしらで運動している。「運動しましょう！」としなくてもしている。

うちの園では、1歳児の遊ぶスペース寝るスペースを決める時に、「遊んでいる時にトイレに行きたくなるから、トイレの近くがいい」と職員が言ったので反対した。それは、1歳は歩きはじめた子の一番大事なことは歩かせることであって、トイレの近くにすることは先生が便利なのであって、遠くすることでそのたびに歩き、途中階段や坂道を歩くだけでも十分運動になる。「運動しましょう！」と運動するのでなくてもかなり運動はする。もう一つ、幼児期や乳児期の運動はどういうものが必要かをもう一度きちんと考える必要がある。筋力トレーニングのような運動は小さい子には必要ないと言われている。筋力を整えるものはあまり意味がないので、持久走は意味がない。長く走る、多く走ることは小さい子には意味がない。それよりも体幹を育てるではないが、バランス力をつけることが大事。そうするとドイツのメーカーからバランスをとる玩具が多い。お皿を逆さにしたようなもので、ぐらぐらして乗っかるとか、という運動が主。走る廻ることが運動と思ひこむのは大人の考えでバランスをとる、スウィングするとかが大事な運動と言われている。鉄棒も小学校以上でするのは腕の力をつけるため、乳幼児期はぶら下がってぶらぶらすることが必要。鉄棒でなくてもぶらぶらすればいい。この時期の運動はどういうことか。本当は保護者も歩いて園に通ってきてくれるといい。それだけでもかなり

運動になる。

この時期の運動能力とは何か、敏捷性、柔軟性と思うとそんなにスペースはいらない。そうはいつでも走り回ることも必要だろうと週に1回、小学校の校庭を2時間分園児に貸してもらっている。小学校の校庭で走り回っている。崖をよじ上ることも都会では難しいので、園の裏に公園があるので子どもたちはそこで上ったりしている。園の中だけで運動するのではなく地域にある財産を使う。園の財産を貸すという意味もある。地域の方も使ってください、その代わり地域のものを使わせてもらい、みんなで共有していくことも大事。ドイツの話ではないが参画ということになる。お母さんだけで「子育てをしないで！」というように園だけで保育をしないで、いろいろな場所で保育をすることを考えるといい。監査の人と揉めたことだが、私たちの散歩は小学校以降の社会科見学と違うのは行った先が目的ではなく、行く途中に色々なものを見つけること、気づくこと、感じること。これがお散歩の意味です。行った先の公園で遊ぶことが目的ではない。途中の子どもの会話を引き出すことは先生の働きかけが必要。それだけでもかなりの運動量になる。蟻を見つけたりダンゴ虫を見つけのぞき込むだけでも屈伸運動になる。生活と遊びの中に運動が入っている。抱っこしてトイレに連れていく、遊ぶ場所へ連れていくではなく、行き帰りも保育と思った方がいい。生活全体を運動と捉えるといい。後はバランスをとるなどはそんなに広い場所はいらない。ドイツではプールに夏あまり入らない。それは遊びとしての水遊びは園です。スポーツとしての泳ぎは課外で行うと言っていた。園でやることは何をするか、園はスポーツジムではない。質問のように量は子どもによって違う。物足りない子たちは一斉に座らせていると挫けてしまうことがある。そういう場合もあって、いけないときに走り回ったりするので私の園では、思い切り体を動かせるようにしようと毎週水曜日は運動する日を設けている。その日は少し片づけて運動する日にする。見学してもらおうとわかるが、運動するスペースが少ないのでポルタリングをできるようにしたり、狭いなりに体を動かす場所を工夫するといい。ただ筋力トレーニングのようなものは必要ない。一つの場所だけを体を酷使するようなものは危ない。サッカーをするからといって、シュートばかりさせるのではなく体全体を動かす。その中でどういう運動があるかを考えるといい。園として工夫をしてみてください。

**1歳児の担任です。1歳児の部屋は遊戯室を棚で仕切っているので遊食寝が全て同じ部屋になっていて、どう環境を変えていったらいいかも困っています。また棚にはアルバムなどが入っていて、収納も出来ない状況です。午睡時には、年中や年長も一緒に寝ているので玩具をとっておき、続きをまたするというのも難しいです。**

日本は部屋の広さが難しい。どうしても収容する施設と思っているようで教育する場と捉えていない。子どもがこれだけ入るじゃないかという言い方しかなく園としては大変。まず一つ考え方を伝えます。大きくいって地域によって違いがあることを伝えたが国によっても違う。保育は文化の中に入っている。ドイツでは保育室はひとつずつが区切られている。日本の保育園・幼稚園に近い作りをしている。家庭やお城がそういう作りになっている。日本と大きく違うのは、日本は小学校をモデルにしている。区切っているのは年度別に教えるために部屋が仕切られているから。その中で子どもをしゅして学校建築を国が明治にされ今の校舎。先生が一方向的に教えるから前に教卓があって机が並べられ、先生が話す声が届くようする。一番教えるのにいいのは閉じ込めた方がいいので、学校の校舎は牢屋をモデルに作られている。兵隊の宿舎をモデルにして学校建築が明治に制定した。先生が教えるので机が並べられ、先生が声、視野が届くのが7m×9mの教室の距離。机間注意と言って見回るので並べたら一部屋50人。ノートは右手で書く人が多いので、影がでやす

いので光りは左から入るように窓が作られている。ドイツではそうではなくて用途が決まっている。ベツルーム、ダイニングルームと部屋によって用途は違うから、部屋と部屋の間は部屋のドアで行き来をする。廊下は細長い部屋として使っている。城や家庭をモデルにしているの部屋は分かれているがこの部屋は絵本、ごっこ用途で分かれている。廊下は直線なので走るとか、砂場とかちょっとしたコーナーが廊下に置かれている。私の園を見るとわかるが3,4,5歳は一部屋で廊下はない。私の園は日本家屋をモデルにしている。日本は襖で仕切って狭くしたり広くしている。色々な用途があるので作り掛けではなく、ちゃぶ台は仕舞うために丸く作っている。ドイツでは机をたたむなどはない。日本は用途によって変わるので片づける。うちの園に来た時に「片づけないですか？」と聞かれたが、海外ではあまり片づけるということがない。日本では食事の後に机をたたみそこで寝た。片づけるのは何もなくて文化になっている。片づけるというと、きれいになることを意味するがその部屋で別のことをするからで、日本の文化があるから一部屋にして仕切りは家具等として広さを変えるようにしている。自分の園が教室のように部屋が分かれていて中々この保育ができないと言われるが、そういう園はドイツのように用途に分けるといい。自分のクラスはどの部屋でやると決めるのはいいが、遊ぶ場所、ゾーン・コーナーはこの部屋にはごっこができるようにしようとか、お集りは自分の部屋でも好きな遊びを分けて、行うこともある。

今回の相談のように一部屋で3つしないといけないことがある。例えば、3,4,5歳がどうしても狭い。お昼寝をして食べたりしないといけないときは3歳の部屋を寝る部屋にして、4歳は活動の部屋にして、5歳がランチの部屋と分けることもできる。何で分けないといけないかという、子どもの活動を保障してあげたい。大人の都合で片づけなさいと片づけるとせっかく作ったものを中断させてしまう。なので、できるだけ分けましょう、狭い場合は活動と活動の隣りあわせで考える。最後まで制作ができるようにするしかない。部屋がない時は子どもの活動を最後まで保障して残せるような工夫をする。全員が全員で動くのではなくて、中断しなくてもいいようにし、先に食べたい子は先に食べられるようにする。お昼寝もさあ、寝ましょうではなく、最後まで食べられるような工夫をするしかない。それから、子どもの作品を飾るのは子どもの成果を評価するために飾ること。途中のものの続きを保障すること、もう一つは作っている人が他のものを参考にするという意味がある。多くの園は壁面装飾といって、子どもに関係ないものを飾ることが多い。1年間変えることなく色褪せていくものを飾ることが多いが、それだったら子どもの作品を飾った方がいいと思う。途中のものを保障するというのは難しいが、子どもの作品を大事にしていくのだったら、スマホで写真を撮ってプリントしてファイルしておくとか、CDに保存し作品が見れるようにしたりして子どもの作品を大事にすることは大切。アルバムが入っているとあるが、収納場所にアルバムがどれくらい、どう使われているかわからないが、収納されていたら何が優先されているかを考えるしかない。園の中でロフトを作る。1歳児で静的、動的スペースを作った。子ども達は自分たちでどんどんスペースに移っていった。子ども達から走りたくなったらどこで走ればいいのかと聞かれた。今まで物置にしていたところを遊びのスペースに変えて、随分物置ばかりだった。学童をやっていた部屋が閉鎖して、その一部屋が空いただけなのに、区からすべての年齢の子どもを1.5倍に増やせと言われた。1.5倍になることで他の園に通っていた子たちが園に入って来た。先生たちに約束したのはどうせやるなら、嫌だと思わず工夫しようとした。そして、前より良くなったと言っていた。押し入れの中も出したり、色々な工夫をした。子ども達が2階で過ごすか3階で過ごすかを選択するようになった。何を基準に分けるかを考えたとき、今は静かに食べたい子は3階、わいわい食べたい子は2階と分けているが静かな方が人気がある。もっと静かに食べたい子はお茶室で食べる。この部屋どう？と聞くと「落ち着く！」と言っていた。まずは何を優先するか、広いことに越したことはないが、無駄なスペースはないか、めったに使わないホールが1日中使わ

れていないこともある。全体を見直して子どもの必要なものが手の届くところに置く。保育室は子どものために必要なものを置く工夫をしていくといい。気をつけないといけないのがロフトや家具を変える場合は、その年の担任だけではないこと。園長として困るのは、「どうしてもこれが欲しい」と言われ奮発して買っても、翌年いりませんと言われることがあるので、全員の総意で買うようにしたほうがいい。模様替えもそう。うちの園は年長の先生が2歳児の部屋をこう変えたほうがいいと提案することがある。みんなで話して模様替えをすると何がいいかという、4月に変えなくていい。4月に入ってからも何も変えなくていい。4月は新入園児に全職員で当たる。みんなで相談をして、みんなで知恵を出して工夫をするという。うちの園でこういうことがあった。ブロックを作っていたら、ある子が不用意に壊してしまい、みんなが落ち込んでいた。ある5歳の子が3階に上がってしまった。なんだろうと思ったら3階で図面を書いて来て、みんなに「この続きを作ろうよ!」と図面を見せた。その図面を見て作ったことがあった。壊してしまったときもそうだが、子どもの知恵で作ったこともあった。私は子どもが何かしらの工夫をしていくと思う。困った時に子どもに相談すると何か言ってくれる。先生が全部用意するより、子どもに相談する。どうしても職員の手が足りないときは相談すると、子どもが「今日はいい子でいるから」と言ってくれることもありうる。困る状況をいい保育になるように工夫をするという。違うところに活かしていくしかない。ぜひ次のいい知恵として皆で考えるきっかけにしてくれるといいと思う。

### 【異年齢児保育】

現在1~2歳児を一つのフロアで保育しています。1歳児18名、2歳児24名でクラスを区切らず生活を中心に発達にあうように心がけています。しかし、他の園の実践を見ていると「居場所」としてのクラスの場があった方がいいような気がしています。指針の「情緒の安定」という面でも、少人数のグループという話もよく聞きます。どちらがということでもないかもしれませんが、環境づくりで何かいい方法はないでしょうか。

私の園ではクラスがあります。3.4.5歳の担任がいます。3.4.5歳でクラスAクラス、Bクラス、Cクラスというように異年齢でクラスを作ることもあると思う。いわゆる所属観、情緒の安定とはまた違うと思う。指針の中に情緒の安定にはクラスを決めることは書かれていない。所属観は子どもが自分の居場所があることに子どもは安定すると思う。例えばそれぞれの家庭があるとする。その子どもにとっての所属観は自分のうちであり、部屋ではない。その子の所属観は、園そのもの。園にいと安心する。園のどこにでもその子の場所を作ってあげる。園全体がホッとできる場所にしておかないといけない。職員室だって子どもの居場所であると思っている。昔、部屋から出てしまう子がいると職員が言ってきたことがある。「あなたが考えている部屋とはどこまでのこと？」廊下に出たら部屋から出ていったと思っていた。廊下も部屋だと思ったら廊下へ行った子になる。部屋から出た子にはならない。子どもは色々なところで学んでいると思っている。園の中がその子にとっての居場所であると本来思っている。園の次が自分のクラスが次の所属観としてある。

ドイツではそうだが、お集りは自分のクラスでお集りをする。ですから次の段階の所属観の狭さ。うちの場合はクラスに関係なく3.4.5歳が一緒。ドイツでは、オープン保育と言ってどこでも自分の居場所になっている。新しい取り組みでオープン保育をする場合は、先生がどの部屋も自分が所属している園だということで、先生がいろいろなクラスに行ったり、トイレや調理室にいることを先生がまず経験する。自分はこのクラスではなく、すべての場所で受け持つことをするそう。その次に子どもたちは園のどこへ行ってもいいとすると流行っている。ただし、お集りの時は園全体に聞こえるような鐘を鳴らして、所属している部屋に戻りお集りをする。もう一つドイツで森の幼稚園が流行っている。森全体がそ

の子の保育の活動の場所。園舎もクラスもない、その子は情緒の安定はしていないかですね。森を使って保育をしている。そういう時にその子の居場所は先生となる。先生が自分の居場所、先生がいることだと思っている。所属観や安定は、いざとなったときに駆けつける場所があるかどうか。空間として、人的場合もあるかもしれない。そういうところがあれば森の中でも安心して自由に遊べる。これをつけるためにドイツではオープン保育のようにどこへ行ってもいいので先生の居場所をはっきりする。ですから、先生はあちこち遊び廻らないでパラソルの下に座っていると、先生同士でお茶を飲んだりしている。それは、子どもがここに行けば先生がいるという安心感と言っていた。子どもの居場所をどう捉えるかだが、お集りでは自分のクラスに戻ることもある。3.4.5歳の部屋はどこへ行ってもいいが、森も自由時間は森の中のどこへ行ってもいいが、約束事として、この鐘の音が聞こえる範囲で遊びなさい、ということをしている。居場所を作ることが一つ。

規模も少人数のグループでどうかと言ったときに、まず一つ小学校は外国は人数が少ない。日本は1クラスが多い。学校の先生がクラスの人数を少なくすべきだと言っていたが私の体験では、小学校を務めていた時にクラスは40数人いた。最後の年は36名だった。私としては少なくなくてラッキーと思った。今でもクラスの子の名前は言える。少なくてもいいと思ったのは通知表の所見欄で飽きるのが大体35人くらい。36人だともう終わりと思えるがクラス運営に困った。この子は最初に意見を言って次はこう言うと思定して授業をしていた。子ども同士の授業を組んだときに36人だと役足らず、人数が足りない、これじゃ困ると思った。今は1クラス15人くらい。その経験で少なくてもいいというのは、先生が管理する場合は少ない方がいい。保育も少ない方がいいのは管理する場合。ただし子ども同士で関わるには少ないと役割が難しい。少ないと全部先生の指導になる。先生の目が行き届いてしまう。東京で認証保育園といってビルの一室で保育をする園が多くなってきている。そうすると、子ども同士の関わりができていない。一挙一動を見られているので幼く見える。自分で考え自分でやらない。全部先生に見られているので子どもだけの世界を作った方がいいと思う。当然、先生は見えていないといけなのだが、せいがの森は2階から調理をしているところが見える。ただ全部は見えないようになっている。見られていない子どもの世界を保障すべきだと思っている。一部屋しかないなら段ボールで隠れられたりしないといけなくも思っている。管理している人たちは少ない方がいいと言う。「アメリカは15人くらいで少ないでしょう？」と例を出す人がいるが、外国は一人ひとりの活動を認めるために少ない。管理するために少ないわけではない。

ドイツで小学校の見学に行った。算数のプリントを解いていた子たちは、どこで解いていたかという廊下や吹き抜け、靴箱のところで行っていた。部屋にいたのは2人だった。40人が散らばったら無理。日本は部屋から出さないために40人くらいじゃないと見張れない。それだったら複数の先生にすべき。20人ずつ2つクラスを作るなら、40人で2人の先生が見た方がいい。自分の思い通りにクラスを動かしてしまうからであって、外国が少ないというなら子どもが自主的に動けるようならいいが、集める時に少ない方がいいでしょと言うが、私の園ではお集りを10人でやる時もあるし90人で行うこともある。様々な経験をするために少ない方がいい時もある。そのために部屋を仕切れるようにする。

少ない人数の方が管理しやすいでしょというなら反対。子ども自身が自分たちで生き生き活動する場なので、あまり少ない人数よりもいろいろな体験をさせた方がいいと思っている。それぞれのやり方、全員でやるのではなくて、私の園ではお茶室では8人くらいで少ない人数で保障しようとか様々な集団体験が必要だと思っている。そのために部屋がフレキシブルに区切った方がいい。幼稚園に施設整備指針というのがある。様々な集団を作るために様々な仕切りで部屋を仕切りましようとして書いてある。いろいろな集団を作れるような仕切り、パーティー会場でもそう。30人しかいなかったら仕切るとか、いろいろな内容によって変える必要がある。その中で本の読み聞かせをするなら先生の両隣に子どもを読み



聞かせるとかが必要。そのためには一人で遊んでいる子は1人で遊べるようにする。何をしたいかによって集団機能を変えるといい。何よりも子ども同士の関わりを体験させたいと思うので、集団が必要だと思っている。実際にやってみたら必要と思っている。管理するなら少ない方がいいと思う。背景を見ないとわからないが、いろいろやってみるといい。どういう時には少ない方がいいとか、こういう時は多い方がいいというのが分かってくるのではないか。

## 【保育士の対応】

**見守る保育をするにあたって職員間でどこまでという区切りが、ポイントがその都度異なり悩んでしまいます。経験がある先生でも異なってしまいます。経験がある先生でも異なってしまいます。新卒や中途の先生に見守る保育の中身や実践を教えたいが、うまく教えることができないという悩みがあります。園の研修などの時間を使って、職員間の共通理解を深めたいのですがポイントなどがあればご教授頂きたいです。**

まずは試行錯誤をして振り返りをしながら見つけていくしかない。事前にどこまでというものはない。わかりやすいのは喧嘩でいつ介入をするか。それはどうしてかということ、介入をすることが遅いと子どもが怪我をすることがある、体の怪我と心の怪我もありえる。喧嘩が起きて片方が泣いていました。まずは怪我をしているかどうか。泣いているだけだったら泣いていることも、泣いている子にとっても必要なこと。怪我をしている場合、つかみ合いをしている場合は、行かないといけな。どんな育ちをするかを見ないと止めることだけに必死になるので、どういう育ちをさせていくかだと思。私の園で新人に見守る保育を教えていることがあった。あまりそういうことはないがこういうことがあった。ブロックを積んでいる時に不用意に壊してしまった子がいた。その時にベテランの先生が新人の先生に「早く集まって！」と言った。「不用意に子どもが壊してしまって、ここからが保育だよ！」と新人に言っていた。その後子どもが言い合いをしていたが、だんだん解決したら、「ほらね、先生が行っちゃったらこういうこと起きないんだよ」と新人の先生に言っていた。お集りの時に保護者が迎えに来ていて喧嘩を始めた。その時も「お母さん見ていてください、すぐに先生が止めたら子ども同士の関わりが起きない」と言って見せていた。私たちの保育は泣いているか、いないかではない。映像で泣いているかどうかを見せても意味がない。どこで止めるかは先の見通しを立てないといけな。私たちはいい研修方法を見つけた。それはテーマに沿って先生たちが動画を撮る。例えば、「思いやり」というテーマで子どもを観察してみようと年間でテーマを設ける。そうすると職員は動画を撮ろうとするとき、困っている子を見たときに助けるだろうと見通しを立てて動画を撮りはじめる。予測しないと動画は撮れない。きっと子どもたちで解決するだろうと思って撮り始めても、やらないこともある。先生がついやりたくなるが動画を撮っているから、もう少し待とうとなる。予測を立てることは動画を撮ることで力がつく。どうなっていくかが分かる。うちには担当がいて、その担当が編集して成長展の行事で保護者に見せる。その前に保育者が手を出してしまったらこんなことが起きないと伝えている。子どもが泣いていて、放っておいているように見えるが、こんな意図があるということを伝えている。動画を撮ることで予測している。若い職員を育てるにしても、テーマを設けて撮るといい。「危機回避能力」で撮ると、子どもが歩いていて石があるから躓くかもしれない。越えるだろうと思っても、躓いて転ぶかもしれないとなると、この子は無理だったと気付く。どこまで見ていていいかが分かる。これはある意味では難しいのかもしれないが、見守るためには見通しが立っていないと難しい。

そのためには、子どもの発達を理解していないといけな。ある公立の先生と勉強会があった。怪我をさせないために

という勉強会があった。怪我の少ない園の実践発表があった。どんな保育をしているか、怪我が少ないかということ再現ビデオがあった。最初は子どもが本を読んでいたら、ある子が取ってしまった。子どもが「えっ!？」となったら先生が、「この子は取りたくて、取ったんじゃないんだよ、ごめんね」と先生がすぐに来て謝っていた。別のシーンでは後ろの子が思わず前の子を蹴飛ばしたら、先生が飛んできて「何も蹴飛ばしたくなくて蹴ったんじゃない、つい、ぶつかったんだよ、ごめんね」と紹介されたときにどう表現していいか困った。怪我をさせないならそうだけど、育ちはどうかと思った。私たちはそういう保育をしたいわけではない。次に子どもたちがどうしていくか、怪我をするなら止めないといけない。後で振り返りをして怪我をした場合は振り返って、この子の場合はその前に先生が介入した方がいいのではと、話し合いをしている。事故報告の時に何で怪我をしたかと話したときに、近年、顔を縫う、上半身の怪我が増えているという報告がある。上半身を支える力が低くなっているので起きているが、うちの園の年長だけ平均より高く怪我が少ない。なぜなら雑巾がけをしているから。ハイハイする時期が最近の子は短い。座り込んですぐつかまり立ちをしてしまっている。ハイハイをさせる、そのためにはトンネルなどをくぐらせることでハイハイするだろうと、怪我をするから角にゴムを張るだけでなく、ハイハイが足りないからと赤ちゃんがくぐるトンネルを注文した。昨日のうちの園の発表があったが、マスキングテープをいっぱい貼って線路みたいに張り巡らせたなら、電車を走らせるために、いっぱいハイハイをしたのでトンネルをキャンセルした。自分から防ぐために検証すること、3つ目はどこで先生が手を出せばいいかということ。ちょっと遅いから怪我をしたら、もう少し早い方がいいねとか、テンションが高くなってきているから止めた方がいいね、と話し合いをする。怪我の対策・再発を防ぐ。3つの観点から再発を防ぐことを話し合う。どこから介入するかを検討する。ある子が腕の怪我をしてギブスをしていた。平均台をやっていたら怪我をして腕を骨折した。最初それを聞いた時「あの子の親か〜」と思った。何故かという以前苦情を言われた。ふとその保護者が0歳の部屋を見たら、泣いていると放っておかれ、それにはこちらとしては意味があるのに苦情を言ってきた。その親の子どもで骨折をさせたと思ったら、初期対応をした先生がよかった。「平均台から落ちたら、他の子は顔から行くのにと手から言ったからすごい」といったら何も言ってこなかった。先生たちはどこで手を出すかを分かっている。ただし、個人差があるかもしれない。個人差によって怪我をしたら皆で話し合いをしている。ただ個人差をうちでは認めている。先生によって違う、自分ではここで止めるが他の先生は止めなかったから、こんなことが起きたと自分の止め方を考えたりする。私は保育は怪我をしない場合は試行錯誤するしかないと思っている。新人は教わってその通りやれるわけではない。

例えば、子どものことは推測できないと親は言うが、私の娘が20代で母親になった。当然何で泣いているか最初はわからない。お腹が空いたのかなと思ったら飲まない。眠いのかなと思っても寝ない。結局、暑かったんだと繰り返すことによって、こういう泣き方はお腹が空いた、どこか痛いんだと母親らしくなってくる。新人もそう。最初は試行錯誤することで、だんだんベテランになってくる。最初から経験を教えたところで知識で学ぶことではない。実際に子どもと関わりながら学ぶこと。失敗を繰り返したり、違う対応をして経験を積むことで次第に子どもの予測がつく。これをベテランは待つ力がないといけない。イライラしては人は育たない。失敗を繰り返しながらいい保育者になるように見守った方がいい。どこまで見守っていいか、判断できるようになる。昨日は月曜日だからという説明をした。曜日によって早めに手を出している。それから個人によってここで手を出すとかあるので、ここで手を出さずだと思わないでください。朝の様子によっても変わってくる。これは経験から学ぶしかない。そういうことを学ぶ余地を与えないといけない。個人によって違うことも認めあげる。どういう活動を見ていくかを学んでいくことが必要だと思っている。

園で見守る保育を実践して6年目になります。前の一斉保育や担当性をしていたベテランの先生と壁があります。少しずつ変わっているところもあるが、保育の話になると平行線になり、子どもの姿から話しても同じ目線にならないことが多いです。理論を持って話すことも大切にしていますが、圧力（マイナスを見る、出来なかったらどうするの？保護者の目線を気にする）がかかって、子どもの姿から見守る保育が進めにくいです。全体の風土をよくするためにはそうしていくといいでしょうか。

見守る保育に変わるだけでなく、変えることには非常にエネルギーがいる。人間の脳の仕組みとして、変えることに抵抗をする。どっちがいいかというより変えることに抵抗する。変えた後が見えないから不安になる。ですから、明治政府が江戸時代までの教育が世界一と言われ、寺子屋や藩校はあり、習熟度別で異年齢で自発的な教育的だった。明治に入り、日露戦争で多くの国民がなくなり、多くの兵隊を作らないといけない。国は軍事教育を含めて一斉の教育をした。世界で産業革命が起きて、富国強兵といって国を富ませ強い兵隊を作らないといけない。そこから学年別になった。その時の猛反対は今ところではなかった。「年齢別にしたら発達しないのではないか？」「子どもが自発的ではなくなるのではないか？」と猛反対した。それを国の力で押し切ってそうした。人類の長い歴史の中で明治から今までしか年齢別しかない。世界では第二次世界大戦後異年齢に戻ったのに、日本は戦前の教育形態が残っている。そこで教育された人が教育をするので変えるのは難しい。

私の園では不思議だが、私の園でもかつて年齢別をしていたし、異年齢もなかった。リーダーだけを呼んでこんな保育をしたいと提案したら、ベテランの先生からこんな声があった。「楽しそう、これで楽になる」。一人担任のプレッシャーと言ったらない。その先生と話すと、「二度と年齢別はやりたくありません。もう二度と戻りたくない」と言う。うちの場合は経験者はそう思って率先してくれた。若い人はそういうことはなく柔軟。私の園ではそういう反応だった。うちの園で定員が1.5倍になったときに、他の園に通っていた子が来るから最初から異年齢は無理だろう、ゾーンも無理だろうと年齢別で始めた方がいいと年齢別で4月から始めた。昔、幼稚園に勤めていた先生が幼稚園を思い出した。4歳だけでやっていたら一斉にやるしかない。そこに5歳がいたら5歳がやってくれるのに、4歳だけだったら、先生がやるしかない。先生が疲れて1日で音を上げて翌日から異年齢にした。うちの園ではこの質問がわからない。年齢別、一人担任は先生の保育を見学してどんな保育をしているか見てみたい。一人担任をするのは他の人に見られたくないから、学校の先生もそう。一人の先生の言葉かけするから将来に影響を与えてしまう。小学校なんかでは研究授業と言うものがある。本当はみんなで行った方が楽だが、やったことがないことなので、余計な仕事が増えるのではないと思う。大変になるのではないか、自分でどうしていいかわからないことをやるのは不安になる。上手くいったのは2つ。楽しそうと思うこと、楽になると思わすことが大事。理屈で追い詰めてもダメ、余計頑なになる。ネガティブなことばかり言う。先回ってこんなことができるようになる、といい方を言うしかない。

リジリエンシーという言葉がドイツでも中心になっているが、立ち直る力をつけようとしている。これがアメリカの研究で大きく条件が3つある。まずは誰かに愛されているか。2つ目物事をポジティブに考える人。3つ目が自分が好きな人が立ち直れると言われている。理屈で攻めるよりも、前向きに考えていくこと。頑なに変えない人は誰かに愛されて来なかったかもしれないので、皆で好きになるしかない。ワイワイ楽しくしようと皆でやるより、一人の背中に掛っちゃうからとするしかない。理屈でいい保育と言うよりも、実践している園が楽しそうに日々を過ごすこと。それが広がる理由になると思う。「大変そうだね！」では広がらない。なんか面白そうと思わせないといけない。ぜひ、そういう園が広がるかどうかは皆さんが楽しくやっているかどうか。先生が楽しい毎日だったら子どもたちも毎日楽しく通ってくる。その

楽しさが新しいものを生み出す。よく言うのが北風よりも太陽。どんなに強くいっても、頑なになる。いいところを褒めて頑なになった人に学ばせてください、と解きほぐしてあげた方がいい。うまくまとめることを評価されていたが、そうではなくて子どもたちが生き生きしているかが新しい評価。そのためには先生たちが生き生きしていくこと。理詰めせず、その先生を認めたり、学ぶ姿勢を持ってあげるといいと思います。その人に教えるよりは、教わることで変わってくる。それは異年齢の良さでもある。下の子に教えることで上の子が上の子らしくなるのは、教えたり手本となろうとすること、同年齢ほどいじめが多いと言われている。異年齢の中では自分の良さを見つけやすい。先生同士も異年齢集団なので上手にやってほしい。これが今まで学んできたことが時代で変わってきていることもあるので、その先生のいいところを見つけ皆で学ぶ姿勢があると偉そうに教えはじめるので、そういうことを大事にする必要があるならチームで行う面白さを伝えていくといい。

## 【その他】

**少子化が進む現代において、今自分たちが関わっている子ども達、未来を生きる子ども達が幸せに過ごすようになるには、どのような取り組みが必要だと思いますか？**

学力の高いフィンランドからいろいろな教育を学ぶことが起きている。その中にフィンランドの人と話したときに「教育熱心ですね」と言ったら、「子どもが少ないから一人ひとりの子どもが大切なんです」と言った。少ないから大事にして、多いから蔑ろというわけではないが、社会として一人ひとりが必要になってくる。社会というのは色々な役割の中で支え合っていくのが社会。どの部分から支えていくかは生まれたときから天から役割を授かっているような気がする。そういうところの方面に伸ばしそれが職業となれるような生き方をする。私は昨日も話したが非常に無口、しゃい。私の孫は似ているのだが知らない人とは喋らない。意外と喋らないのだが、子どものことや教育のことになるとよく喋る。結婚式の挨拶をするときは上がってしまう。ある時、いい方法を見つけた。それは挨拶を辞めて講演にした。子どものことを講演するとペラペラ喋れるというように、ふと子どもや教育は向いているのだと思った。これが職業にできるのは幸せだと思った。こういうことを整理することが役目だろう、偉いから講演するのではなく役目なんだと思っている。というような日々を子どもたちに送らせたいと思う。子ども達が天から授かった、向いている部分を伸ばし、人の役に立つ職業に就かせること。社会の中には色々な役割が必要。それを教育という全員を学者にするように教えたり、全員が商社マンになって、英語で商談するような子にする。歌を歌うと全員を歌手にするかのようにするが、その必要はない。その人の生活に潤いを持たせ歌を楽しみ、作ることを楽しむようにする。ということを思った時に私たちは前から言っているが、人がそれぞれ持って生まれた特性がある。その子のその方面に活かすことが教育。一つの方向に仕上げることではない。養成校の学生さんが来るときにこう助言する。「皆さんが就職するときに、持っている良さを活かしてくれるところに就職してください、その園はきっと子どものいいところを伸ばそうとするから」と言います。

人はそれぞれ自分の生き方を見つけ、「共生と貢献」ではないが、貢献できる力に変えていくことが私の想い。ゲストからスタッフにということをやりたい文句として言うが、寝たきりになっても何か貢献することがある。障害を持ってもきっと何か必要なことがある。人は決して無駄に生まれていないと思っている。それが環境であり教育。持って生まれたものを悪い環境にいれば、悪い方に使えてしまうこともある。それをそうではない力に変えること。そのために色々な経験や、遊びを通して何が得意かが遊びの中には色々含まれている。遊びは子どもにとって総合的な学び。子どもが好きなことを見つけ、将来伸ばしていくことをしてあげたい。そうすると時代によって必要なものがある。いくら人工知能やIT

があっても、現在ない職業を子どもたちは作っていかないといけない。なくなる職業もあるが作っていくためには、色々な経験をさせ、色々な分野に就けられるようにしていくことが大事。その子の特性を生かしてあげる、生き方を後押しすることが、「見守る」という言葉の中に入っている。外国で最近評価されるのは、ただの手法だけでなく、社会に出て不良になるかもしれないが、保育園時代見守ってくれていたのと、思えるだけでその子は共生できる、復帰できると言われている。どこかの時代に見守ってくれていた人がいると支えになると言われている。せめて、私たちの時代にはそういう立場、存在になってあげたいと思っている。どういう人生を過ごすか、その子が何をしていくか分からないが、どういう生き方をしても見守っていること。何かあったら帰ってきていいよと言えることが幼児教育の役目でもあると思っている。変えること、新しいことは難しいこともあるが、環境や条件も揃っていないこともある。皆さんの知恵を出し合って何を優先していくか、物事の両立は難しいが頭のいい人は優先順位を決められる人だと思っている。自分の園をいい園にして頂けたらと思う。その中で私が何か役に立てたらいいと思うし、お互いの園で助け合えたら助け合ってほしいと思います。ありがとうございました。

本稿は、2017年9月5日に行われた第45回保育環境セミナーの「Q&A」の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)